

星あかり

泉鏡花

青空文庫

もとより何故なにゆゑといふ理わけはないので、墓石はかいしの倒れたたふのを引ひきず

摺すり寄せて、二ツばかり重かさねて臺だいにした。

其その上うへに乗のつて、雨戸あまどの引ひき合せの上うへの方ほうを、ガタ／＼動うごかし

て見たみが、開あきさうにもない。雨戸あまどの中うちは、相州さうしう西鎌倉にしかまくら亂みだれ

橋ばしの妙長寺めうちやうじといふ、法華宗ほつけしうの寺てらの、本堂ほんだうに隣となつた八疊やふの、

横よこに長い置床おきどこの附ついた座敷ざしきで、向むかつて左手ゆんでに、葛籠つづら、革鞆かばんなど

を置おいた際きはに、山科やましなといふ醫學生いがくせいが、四六しろうくの借蚊帳かりかやを釣つつて

寢ねて居ゐるのである。

聲こゑを懸かけて、戸とを敲たたいて、開あけておくれと言いへば、何なんの造作ざうさは

ないのだけれども、止よせ、と留とめるのを肯きかないで、墓原はかはらを夜よ

なかはいくわい
中に徘徊するのには好心持のものだと、二ツ三ツ言争
つて出た、いまのさき、内で心張棒を構へたのは、自分を閉出
したのだと思ふから、我慢にも恃むまい。……
つめたせきたふ
冷い石塔に手を載せたり、湿臭い塔婆を掴んだり、花
筒の腐水に星の映るのを覗いたり、漫歩をして居たが、
藪が近く、蚊が酷いから、座敷の蚊帳が懐しくなつて、内へ入ら
うと思つたので、戸を開けようとすると思ひだに氣がつ
いた。

それから墓石に乗つて推して見たが、もとより然うすれば開く
であらうといふ望があつたのではなく、唯居るよりもと、徒らに
試みたばかりなのであつた。

何なんにもならないで、ばたりと力ちからなく墓はかいし石いしから下おりて、腕うでこまぬを拱こまぬき、差さしう俯つむ向むいて、ぢつとして立たつて居ゐると、しつきりなしに蚊かが集たかる。毒どくむし蟲くるが苦くるしいから、もつと樹こだち立すくなの少ひろくい、廣ひろく々／＼とし
 た、うるさくない處ところをと、寺てらの境けいだい内に氣きがついたから、歩あるき出だして、卵らんたふば塔たふば場ばの開ひら戸きどから出でて、本ほん堂だうの前まへに行いつた。
 然さまで大おほきくもなてらい寺でで、和をしやう尚ばあと婆ふたりさんと二ふたり人で住すむ。門もんま
 で僅わづか三けん四けん間けん、左ゆんで手ほこらは祠まへの前ひとつばを一ひとつば坪坪ばかり花くわだん壇壇にして、松まつ葉ば
 牡丹ぼたん、鬼おに百ひゃく合ごう、夏なつ菊ぎくなど雜まぜ植うゑの繁しげつた中なかに、向ひま日はり葵はなの花はなは高たか
 く蓮はすの葉はの如ごとく押おつ被かぶさつて、何いつ時まの間まにか星ほしは隠かくれた。鼠ねずみ
 色いろの空そらはどんよりとして、流ながるゝ雲くもも何なんにもない。なか／＼氣き
 が晴せい々くしないから、一いつ層そう海うみ端はたへ行いつて見みようと思おもつて、さて、

ぶらく。

門もんの左ひだり側がはに、井戸ゐどが一個ひとつ。飲水のみみづではないので、極きはめて鹽しほ

ッ辛からいが、底そこは浅あさい、屈かゞんでぎぶ／＼、さるぼうで汲くみ得えらる

ゝ。石いし疊たたみで穿下ほりおろした合目あはせめには、此このあたりに産さんする何なんと

かいふ蟹かに、甲良かふらが黄色きいろで、足あしの赤あかい、小ちひさなのが數かず限かぎりなく群むらが

つて動うごいて居ゐる。毎朝まいあさ此この水みづで顔かほを洗あらふ、一杯頭ばあたまから浴あびよう

としたけれども、あんな蟹かには、夜中よなかに何なにをするか分わからぬと思おもつて

やめた。

門もんを出でると、右左みぎひだり、二畝ふたうねばかり慰なぐさみに植うゑた青田あをたがあつ

て、向むかう正しやうめん面めんの畦あぜ中なかに、琴彈松ことひきまつといふのがある。一昨日をとつひ

の晩宵ばんよひの口くちに、其その松まつのうらおもてに、ちら／＼灯ともが見みえたのを、

海濱かいひんの別莊べつさうで花火はなびを焚たくのだといひ、否いや、狐火きつねびだともいつ

た。其その時は濡ぬれたやうな眞ま黒くろな暗夜やみよだつたから、其その灯ひで松まつ

の葉はもすらくと透すきとほ通とほるやうに青あをく見みえたが、今いまは、恰あたかくもも曇もつ

た一面いちめんの銀泥ぎんでいに描えがいた墨繪すみゑのやうだと、熟ちつと見みながら、敷しきい

石しを踏ふんだが、カラリくと日ひ和より下げ駄たの音おとの冴さえるのが耳みみに入はい

つて、フと立たち留とまつた。

門外おもての道みちは、弓形ゆみなりに一ひと條すぢ、ほの／＼と白しろく、比企ひきヶ谷やつの

山やまから由井ゆゐヶ濱はまの磯いそ際ぎはまで、斜なに鵲うぐさの橋きを渡わたしたやう也なり。

ハヤ浪なみの音おとが聞きこえて來きた。

濱はまの方ほうへ五六間けん進すすむと、土橋どばしが一ひと架つ、並なみの小ちひさなだけでも、

滑なめり川がはに架かつたのだの、長谷はせの行合ゆきあひ橋ばしだのと、おなじ名なに聞きこ

えたみだればし亂橋といふのである。

此この上うへで又またた立停たちとまつて前途ゆくてを見みながら、由井ゆゐヶ濱はままでは、未ま

だ三町ちやうばかりあると、つく／＼然さう考かんへた。三町ちやうは蓋けだし遠とほい道みち

ではないが、身からだ體たいも精せい神しんも共ともに太いたく疲つかれて居ゐたからで。

しかし其そのまゝ素直まつすぐに立たつてゐるのが、餘あまり辛つらかつたから又またた歩ある

いた。

路みちの兩側りやうがはしばらくのあひだ、人家じんかが斷たえては續つづいたが、い

づれも寢靜ねしづまつて、白しろけた藁屋わらやの中に、何家どこも何家どこも人の氣勢けはひが

せぬ。

其その寂寥せきぱくを破やぶる、跫音あしおとがたかいので、夜更よふけに里人さとびとの懷疑うたがひ

を受けはしないかといふ懸念けねんから、誰たれも咎とがめはせぬのに、拔足ぬきあし、

さしあし、音は立てまいと思ふほど、なほ下駄の響が胸を打つて、
 耳を貫く。

何か、自分は世の中の一切のものに、現在、慙く、悄然、
 夜露で重ツくるしい、白地の浴衣の、しほたれた、細い姿で、首
 を垂れて、唯一人、由井ヶ濱へ通ずる砂道を辿ることを、見
 られてはならぬ、知られてはならぬ、氣取られてはならぬといふ
 やうな思であるのに、まあ！廂も、屋根も、居酒屋の軒にかゝつ
 た杉の葉も、百姓屋の土間に据ゑてある粉挽白も、皆目を
 以て、じろじろ睨めるやうで、身の置處ないまでに、右から、
 左から、路をせばめられて、しめつけられて、小さく、堅くなつ
 て、おどくして、其癖、驅け出さうとする勇氣はなく、凡そ

人間の歩行に、ありツたけの遅さで、汗になりながら、人家の

ある處をすり抜けて、やうく石地藏の立つ處。

ほつと息をすると、びようくと、頻に犬の吠えるのが聞えた。

一つでない、二つでもない。三頭も四頭も一齊に吠え立てる

のは、丁ど前途の濱際に、また人家が七八軒、浴場、荒

物屋など一廓になつて居る其あたり。彼處を通抜けねば

ならないと思ふと、今度は寒氣がした。我ながら、自分を怪むほ

どであるから、恐ろしく犬を憚つたものである。進まれもせず、

引返せば再び石臼だの、松の葉だの、屋根にも廂にも睨まれ

る、あの、此上もない厭な思をしなければならぬの歟と、それ

もならず。静と立つてると、天窓がふらく、おしつけられるや

うな、しめつけられるやうな、犇々ひしくと重いものでおされるやうな、切せつない、堪たまらない氣きがして、もはや！横よこに倒たふれようかと思おもつた。

ところへ、荷車にぐるまが一臺だい、前方むかうから押寄おしよせるが如ごとくに動うごいて、來きたのは頬ほ被かぶりをした百姓ひやくしやうである。

これに夢ゆめが覺さめたやうになつて、少すこし元氣げんきがつく。

曳ひいて來きたは空車からぐるまで、青菜あをなも、藁わらも乗のつて居ゐはしなかつたが、何故なぜか、雪ゆきの下したの朝市あさいちに行くのであらうと見みて取とつたので、なるほど、星ほしの消きえたのも、空そらが淀よどんで居ゐるのも、夜明よあけに間まのな所せ爲ゐであらう。墓原はかはらへ出でたのは十二時過じふじ、それから、あゝして、あゝして、と此處こゝまで來きた間あいだのことを心こゝろに繰返くりかへして、大だいふ

分の時間じかんが経たつたから。

と思ふ内おもうちに、車は自分じぶんの前まへ、ものの二三間隔げんだたる處ところから、左ひだりの

山道やまみちの方ほうへ曲まがつた。雪ゆきの下したへ行ゆくには、來きて、自分じぶんと摺すれ違ちがつ

て後方うしろへ通とほり抜ぬけねばならないのに、と怪あやしみながら見ると、ぼや

けた色いろで、夜よるの色いろよりも少し白しろく見えた、車くるまも、人ひとも、山道やまみちの

半なかばあたりでツイ目めのさきにあるやうな、大おほきな、鮮あざやかな形かたちで、あり

のまゝ衝つと消きえた。

今は最いまう、さつきから荷車にぐるまが唯ただ這すすつてあるいて、少すこしも轆れきろ

轆おとの音おとの聞きこえなかつたことも念頭ねんとうに置おかないで、早はやく此この懊あう

惱なうを洗あらひ流ながさうと、一いつち直線よくせんに、夜明よあけに間まもないと考かんがへたか

ら、人ひと憚はらず足あし早はやに進すすんだ。荒物屋あらものやの軒下のきしたの薄暗うすくらい

處に、斑犬が一頭、うしろ向に、長く伸びて寢て居たばかり、
 事なく着いたのは由井ヶ濱である。

碧水金砂、晝の趣とは違つて、靈山ヶ崎の突端と小坪

の濱でおしまはした遠淺は、暗黒の色を帯び、伊豆の七島

も見ゆるといふ蒼海原は、さゝ濁に濁つて、果なくおつかぶさ

つたやうに堆い水面は、おなじ色に空に連つて居る。浪打際

は綿をば束ねたやうな白い波、波頭に泡を立てて、どうと寄

せては、ざつと、おうやうに、重々しう、翻ると、ひたくと

押寄せるが如くに来る。これは、一秒に砂一粒、幾億萬年の

後には、此の大陸を浸し盡さうとする處の水で、いまでも、瞬

間の後も、咄嗟のさきも、正に然なすべく働いて居るのである

が、自分じぶんは餘りあま大陸たいりくの一端いつたんが浪なみのために喰く缺ひかかれることの疾はやいのを、心こころ細ほそく感かんずるばかりであつた。

めうちやうじ 妙長寺めうちやうじに寄宿きしゆくしてから三十日にちばかりになるが、先さきに來た時き

ぶん 分ぶんとは濱はまが著いましく縮ちぢまつて居る。町まちを離はなれてから浪打際なみうちぎはまで、

およ 凡そおよ二百歩ほもあつた筈はずなのが、白砂しらすなに足あしを踏掛ふみかけたと思ふと、

はや 早や爪つま先さきが冷つめく浪なみのさきに觸ふれたので、晝間ひるまは鐵てつの鍋なべで煮上にあげ

たやうな砂すなが、皆みなずぶ／＼に濡ぬれて、冷ひやこく、宛然さながら網あみの下したを、

みづ 水みづが潜くゞつて寄せ來るやう、砂地すなぢに立つても身體からだが搖ゆらぎさうに思おも

はれて、不安心ふあんしんでならぬから、浪なみが襲おそふとすたくと後あとへ退のき、

浪なみが返かへるとすたくと前まへへ進すすんで、砂すなの上に唯ただ一人ひとりやがて星ほむと

つない下したに、果はてのない蒼海あをうみの浪なみに、あはれ果敢はかない、弱よわい、力ちからの

ない、からだひとちてあそ
身體單個弄ばれて、
刎返されて居るのだ、と心着いて
悚然とした。

とき おほなみ ひと
時に大浪が、一あて推寄せたのに足を打たれて、氣も上ずつ
よろ 踰る
て踰るけかゝつた。手が、砂地に引上げてある難破船の、纔か
に 其の形を留めて居る、三十石積と見覚えのある、其の舷にかゝ
つて、五寸釘をヒヤ／＼と掴んで、また身震をした。下駄は
さつきから砂地を驅ける内に、いつの間にか脱いでしまつて、跣
足である。

なぜ 何故かは知らぬが、此船にでも乗つて助からうと、片手を舷
に添へて、あわたゞしく擦上らうとする、足が砂を離れて空に
かゝり、胸が前屈みになつて、がつくり俯向いた目に、船底

に銀のやうな水が溜つて居るのを見た。

思はずあツといつて失望した時、轟々轟といふ波の音。山

を覆したやうに大畝が來たとばかりで、——跣足で一文字

に引返したが、吐息もならず——寺の門を入ると、其處まで隙

間もなく追縋つた、灰汁を覆したやうな海は、自分の背から放

れて去つた。

引き息で飛着いた、本堂の戸を、力まかせにがたひしと開け

る、屋根の上で、ガラ〜といふ響、瓦が残らず飛上つて、舞

立つて、亂合つて、打破れた音がしたので、はツと思ふと、

目が眩んで、耳が聞えなくなつた。が、うツかりした、疲れ果て

た、倒れさうな自分の體は、……夢中で、色の褪せた、天井

の低い、皺だらけな蚊帳の片隅を掴んで、暗くなつた灯の影に、透かして蚊帳の裡を覗いた。

いぐせい はだぬぎ
 醫學生は肌脱で、うつむけに寝て、踏返した夜具の上へ、
 りやうあし なげか ねむ
 兩足を投懸けて眠つて居る。

まくらなら あをむけ
 ト枕を並べ、仰向になり、胸の上に片手を力なく、片手を投
 げだ あし
 出し、足をのばして、口を結んだ顔は、灯の片影になつて、一
 とり
 人すやくと寝て居るのを、……一目見ると、其は自分であつた
 あたま こほり あ
 ので、天窓から氷を浴びたやうに筋がしまつた。

つめた あせ
 ひたと冷い汗になつて、眼を睜き、殺されるのであらうと思ひ
 ながら、すかして蚊帳の外を見たが、墓原をさまよつて、亂
 ばし
 橋から由井ヶ濱をうろついて死にさうになつて歸つて來た自分

の姿は、^{すがた}立つて、蚊帳に縫^{すが}つては居なかつた。

もののけはひを、夜毎^{よごと}の心持^{こころもち}で考^{かんが}へると、まだ三時^じには間^まがあつたので、最^もう最^もうあたまがおもいから、其^{その}まゝ黙^{だま}つて、母^は上^{うへ}の御名^{おんなねん}を念^{ねん}じた。——人^{ひと}は怍^かういふことから氣^きが違^{ちが}ふのであらう。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷四」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日第1刷発行

1986（昭和61）年12月3日第3刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：鈴木厚司

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星あかり

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>